荀子の鳥瞰的評論

（一）荀子の小傳

孔子は世界に於ける一大聖なり、其人格は東西に渉りて瞻仰せられ、其教義は古今を通じて尊崇せらると雖ども、所謂預言者は其故郷に容れられざるが如く、如何なる大人物も其同時代に於ては、距離あまりに接近せるが爲めに、左程に珍重せられざるを常とし、孔子に在りても亦、先秦の當時に於ては世人の此に對する崇拜の度未だ今日の如きものあらず、寧ろ諸子百家互に相抵排するの間に立ちて、孔子の學も亦諸方面よりの辯難攻擊を免れず。殊に戰國の如き天下糜亂戰鬪纂奪を常とするの時に至りて、先王を述べ禮樂を說く孔氏の學が迂濶視せられしは當然にして、其の甚だ振はざるものありしは蓋し察するに難からず。孔子よりして百有餘歲にして孟軻鄒に出でゝ孔子の道統の嫡系たるを以て自ら任じ、仁義の說を提げて諸侯に游說せしも、用ひられず、孟子を距る復百餘年にして、即ち荀卿趙に出で、又孔氏の儒學を唱ふ。

荀卿は趙の人、名は況、年十五（史記及劉向の傳する所には年五十といふ、風俗通年十五

に作る、今之に從ふ）にして齊に遊學す。蓋し齊は威、宣二王の文學游說の士を喜ぶあり、天下の賢才を稷下に聚めて之を尊寵せしより、騶衍、淳于髡、田駢、愼到、環淵等一時の雋英皆來り會し、爲めに稷下は學者の淵藪たるの觀を呈せり。荀子の時は正に、齊の襄王の時に方る、當時田駢等の徒皆死したりと雖ども、稷下は猶盛時の遺風を存じて笈を此に負ふもの多かりしが如し。荀子茲に在り、善く詩、禮、春秋を爲むと稱せられ、既にして稷下學者間に最も老師を以て目せらるゝに至り、襄王の爲めに重んじられて三たび祭酒となれり。既にして讒に遭ひ、乃ち齊を去りて楚に適く、時に春申君楚の相たり、荀子を用ひて以て蘭陵の令となす。人の春申君に謂ふものあり、曰く、湯は七十里を以てし、文王は百里を以て王たり、荀子は賢者なり、今、之に百里の地を與ふ、楚其れ危からんかと、春申君仍て之を謝す、荀子去つて趙に之く、其の趙の孝成王の前に王者の兵を論ぜる蓋し此時也。後、客あり、春申君に謂て曰く、伊尹夏を去つて殷に入りて、殷、王となりて夏亡ぶ、管仲魯を去つて齊に入りて、魯弱くして齊强し、故に賢者の在る所は、君尊く國安し、今荀子は天下の賢人なり、去る所の國其れ安からざらんと。春申君人をして荀子を聘せしむ、荀子、書を春申君に遣りて、楚國を刺り、因て歌賦を爲つて以て春申君に遣る。春申君之を恨めるも、復固く荀子に謝す、荀子乃ち行いて復蘭陵の令となる。春申君死して荀子亦廢せらる、因て蘭陵に家し、終に茲に卒す、其書を著はせるは蓋し蘭陵閑居の時

に成れる也。荀子蘭陵に令となつて德の施く所其流風餘韻永く傳ふ。劉向の言ふ所によるに、曰く、蘭陵多く學を爲むるを善くす、蓋し荀卿を以て也、長老今（漢の時）に至つて之を稱して蘭陵の人と曰ふ、字を卿となすを喜ぶ、蓋し以て荀卿に法る也と、秦の相李斯及び韓非皆業を荀子に受けたりと稱せらる。

劉向の言ふ所に依るに、荀子著はす所の書、元と凡そ三百二十二篇あり、劉向校讎して其重複なる者二百九十篇を除き、定めて三十二篇となせりと、題して孫卿新書といふ。唐の楊倞其の十二卷なりしを分ちて二十卷となし、又改めて荀卿子となせり、今傳ふる所のもの即ち是れ。劉向が特に之を孫卿といへるに就きては、司馬貞、顏師古より相承けて以て漢の宣帝の諱詢を避けて荀を改めて孫となせりとせり。唯、淸の謝墉謂へらく漢の時尚ほ嫌名を諱まず、後漢の李恂、荀淑、荀爽、荀悅、荀彧の如き、俱に本字を書す、獨り反て周の時の人名の載籍に見れたるものを改稱するの理ある可からず、若し之を改稱すべしとせば、左傳に載する所、荀息より荀瑤に至る亦多きに、何が故に之を改めざる、故に荀卿を改めて孫卿といへるは、荀の音孫に同じく、語遂に移易せるものなること、猶、荆軻燕にあれば燕人之を荆卿といひ、衞にあれば衞人之を慶卿といふが如きのみと。

（二）荀子の學系及び孟荀二家の異同

戰國は支那に於て思想の上に最も生氣の溺渤たり時代にして、即ち又最も哲學の創見に富める時代也、諸子の學、分派は分派を生じ、互に抗爭して相下らず。乃ち孔氏の學を傳ふる所謂儒者の間にも、亦孔子歿後早く其弟子間に流派を異にする傾向を生じたるが如く、蓋し大人物は其德に包容ありて、能く諸種の異材を統一するに足ると雖ども、其人一たび亡べば、則ち其人に待てる統一は忽ち弛解して、各異材互に頭角を嶄出するを競ふに至るを免れざるが爲めにして、是れ惟に孔子のみならず、基督に於て亦然り、釋迦に於て亦然り、近くは之を芭蕉の歿後に觀るも亦然り。而して孔子歿後の儒の分派は其類甚だ寡からずして、韓非に據るに、儒は分れて八となり墨は分れて三となるといへり。其の所謂儒の八流として擧げたる者は、即ち子張の儒、子思の儒、顏子の儒、孟子の儒、漆雕氏の儒、仲梁氏の儒、公孫氏の儒、樂正子の儒、是にして、此れ固より韓非當時の分派なるべしと雖ども、其分派が早くよりして既に存じたるものなるは疑ふ可からず。

孟子の學統は即ち子思に出でたりと稱せらる。漢書藝文志には孟子を以て子思の弟子となしたれども、年代相合せざるが如し、史記列傳によりて業を子思の門人に受くとするを當れりとせん歟。之は兎に角彼の學說が子思の系統中に入るべき者たるは爭ふ可からず。子思の學說は、之を中庸に徵して知るを得べきが如く（中庸を子思の作なりといふには異論

あれど、既に子思の作なりと稱せらるゝを以てすれば、中庸に說く所が、少くとも子思派の儒術の一斑を推知し得べき者たるや論なし)、常識的易行的にして所謂匹夫匹婦も之を識るを得べき儒學の上に、一種の哲學的攷察を加へ、宇宙の本體と人性の內核に向ふて解釋を試みんとせるの特色を帶びたるもの也。故に孟子の學說も哲學的內省的の傾向を有し、其の仁義を說き、性善を說くも、常に內よりして心を治むるを主とし、正に荀子の外よりして之を治めんとすると正反に立つ。

荀子の學統は蓋し子夏の流を汲めるもの歟、子夏は孔子歿して後、西河（魏）に敎授し魏の文侯に師たりしといへば、其餘風三晉（韓魏趙）の間に布きたる者あるべく、趙人たる荀子が、少くも間接の感化を此より得たりとするは、強ち牽强に失するの推論にはあらじ、（莊子も亦子夏の學を學びたりといはる、荀子が同じく子夏の學統を引きて、而して其說に老莊哲學の影響あるを見るは、亦奇とすべし)。而して子夏は、孔子も嘗て文學には子游子夏といへりしを以て見るも、其人博學多聞を以て勝りたるや知る可くして、從つて其學風は、直ちに心に參する內觀的工夫よりも、寧ろ知を致して心を正さんとする外制的手段を尙ぶに在りしなる可し。即ち荀子の學說が主として師法を重んじ、學を重んじ、禮樂を重んじ、外よりして人性を矯めんとするにあるもの、之を子夏に得たるに非ずといふ可からず。

今、孟荀二人を執て之を比較するに、荀子も亦性惡を倡へて人性を說かざるに非ずと雖ども、其學說の大主張とする所は禮樂にあり、即ち荀子は儒學の政治的教育的方面即ち智的實行的方面を得たるものにして。孟子は、王者の政を說かざるに非ざるも、そは竟に彼の理想に過ぎざるのみ、史に尤も詩書に通ずといはれたるを以ても知るべきが如く、儒學の藝術的、哲學的方面即ち主として理想的感情的方面に達せるもの也。此區別は二人者の性行をも併せて表示するに足るものにして、孟子の一生は藝術家的也、當時の時勢よりいへば空想に近き仁義の說を揭げて、殺伐功利、習をなせる諸侯の間に遊說せる、何ぞ熱狂なるや、荀子は政治家的也、齊に祭酒となり、楚に縣令となりて、小規模ながらにも其政治的經綸を實行したり。又其文章に就いて觀るも、孟子の文は跌宕奔放にして圭角あり、意氣人を壓せんとするものあるに反し、荀子の文は極て論理的なり、解說的也、諄々反覆して、人をして首肯せしめざれば已まざらんとす。二人者は、獨り其學說の性の善惡論に於て相反するのみならず、徹頭徹尾相一致す可からざる異型の人物たること、是を以ても推すに足る。

（三）荀子の南方思想との接觸

抑も支那は廣漠たる大陸の地にして、山岳襟帶の障壁を爲すもの殆ど之れなきが故に、政

治上に統一を保ち、三國又は南北朝の如く時に割據分立を見ざるにあらざるも、久しからずして又一統の治に復るを常とす。然れども之を其文明上より觀れば地勢の南北を以て其特色を殊にせる者なきにあらず、殊に先秦の時の如く、漢人種の統一僅に其緒に就きたるのみの際に於ては、漢種の永く占據せる北方の民の思想感情と、漢種の所謂王化を被りて、新に開化せる南方土着の民の思想感情とが、劃然として別樣の趣を呈せるは當然にして、而して北方の思想感情は實際的に、常識的に、世間的に、形而下的なるに對し、南方は、理想的に、熱狂的に、出世間的に、形而上的なるを見る。孔子の儒學は此北方の思想を代表せるものにして、老子の道教は南方の思想を代表せる者なり。荀子は子夏の流を汲み、其宗とする所は固より孔子の儒學にありと雖ども、而かも其の戰國末の思想淆亂の時代に生まれたると、且つ南方思想の淵源地たる楚に住みたること久しかりしが故に、其學說には多少老莊哲學の影響あるを認め得べし。是れ其說に儒として較々純粹ならざるの嫌を存ずる所なりと雖ども、然れども彼の孟子が、其才分の高邁なるに任せて、其行跡游說の士に類し、其口吻縱橫の調を帶びたるものありしに比し、荀子の態度は始終學者的循吏的の風を存じ、此點に於ては寧ろ醇儒の行に幾きものありといふべき歟。

荀子の哲學の一特色にして、而して又其學說の中心たる者は、其性惡論なり、吾人を以て之を觀れば、此性惡論既に老莊哲學により啓發せられたる思想なるが如し、（此は後に於て

說く所あるべし)、啻に然るのみならず、荀子の人君の道を論ずる、又老子の說に近きものあり。荀子が、君たるもの能く賢を尙び能を使ふて、之に任ずれば、拱手して以て天下を治むるに足る、人臣は自ら能くするを以て能となせども、人君は人を官するを以て能となすものにして、人主能く人に任じ人をして事を爲さしむるが故に、一人を以て天下を兼聽して、而かも日に餘りありて治むること足らずと謂へるが如きは、之を孔子の說に得たりといはんよりも、老子の無爲を以て天下を治むるの旨に得たりといふを妥當なりとすべし。韓非が人主の術を說く、頗る荀子の君道を說くと相似る、蓋し韓非、老子を學ぶと謂はるゝも、或は亦直ちに其師たる荀子の說を傳へたるものあらざる莫らんや。荀子が人主の六患として擧げたる、賢者をして之を爲さしめて則ち不肖者と之を規り、知者をして之を慮らしめて、即ち愚者と之を論じ、修士をして之を行はしめて即ち汚邪の人と之を疑ふの一節の如き、正に韓非に同一義の文あるを見るなり。

更に又、荀子の解蔽の一篇の如き、其世俗の諸子の說が、一曲に蔽はれて大理に闇きよりして互に相是非するあるを論ぜるは、較々莊子が齊物論と相比すべきものなきに非ず。而して其の衆異相蔽ふて其倫を亂るを禦がんには懸衡（中正を得るの意なり）に由るべしとなし、更に衡を解して衡は即ち道なりといひ、而して道は心の虛一にして靜なるによりて之を知るを得べしと說ける、其虛といひ、一といひ、靜といふ、豈に是れ老莊哲學其まゝ

の用語に非ずや。子思の中庸も亦其の中を說き敬を說く所、老莊哲學との近日點を認め得られざるにあらざるも、未だ此くの如く其接觸を露骨に呈示したるはあらざる也。

荀子は又其哲學以外の文學的方面にも南方思想との接觸を明示せるものあり、即ち彼の作れる所の賦是れ也。蓋し賦は、詩經の國風等が韻文に於ける北方文學を代表せるが如く、楚辭に濫觴して楚國に發達せる南方特有の韻文なりとす。賦の荀子の作として今傳はる者、賦篇に見る所の數篇に過ぎずと雖ども、以て荀子が南方の地に處るに慣れて、漸く南方思想を攝取したるの左券とするに足らんか。

（四）先秦に於ける人性問題

哲學の發達を攷ふるに、其始めや先づ宇宙の客觀的物質に對する驚異に起り、人自己の內省的考察は之に次ぐを常とす。支那に於ても其易に現れたる所を以て見るに、其觀察は主として宇宙の形質例へば日月の運行、四時の循環、陰陽の消長等の上に在りて、人生の問題としては、之を人間の上に類推するに過ぎず、未だ人性其者を以て直ちに其考察の對象として以て人生の問題を解決せんとするが如きことあらざりき。孔子に至りては其考察較々內省的にして、宇宙の客象に注げる眼を轉じて專ら人間自身の上に向ひ、修身治國の道德的問題を明かにせんことを努たりと雖ども、而かも猶更に一層內省的なる人性の問題に

關しては未だ深く徹底せざる者あり、單に『性相近也習相遠也』といへるに過ぎざりしのみ。子思は孔子に比すれば一歩を進めて、未拓なる性の本質に其研究の耒鋤を加へたれど、眞に人性を以て其學說の基礎とし、其人性論の上に倫理學を築かんとするに至りたるは、蓋し孟子以後の事なるが如し。

孟子が人性を以て善なるものとなしたるに對し、孟子と同時代に告子なる者あり、性に善惡なしとの說を唱へたることある、孟子の書によりて之を知るを得。告子の說に謂へらく、我は之を愛し秦人は之を愛せざるは、仁にして內也、而らば之を善なりと（原文「と」脫）いふ可からず。楚人の長をも長として敬し、我が長をも長として敬するは、義にして外也、而らば之を惡なりといふ可からず、故に性は竟に善惡なく、但外よりして之を矯めて其行ふ所を善ならしむべしと。此說は孰れといへば寧ろ荀子の性惡說に近しといふべく、其の我弟は之を愛し、秦人は之を愛せずといへるは、人間の本性に主我的意志の存在を認めたるものにして、楚人の長と我が長とを同じく敬するをも、性なりとせるは、因習の鑄型に成れる第二の天性を本性と混同したるやの嫌ありて、若し此の誤謬を脫すれば、告子も亦一種の性惡論者となりしを疑はず。殊に其の性を矯めて始めて仁義の行はるべきをいへるも、亦荀子の性惡說の結論と正に相一致する者也。故に荀子の性惡說を以て直ちに荀子の創見に出づといふ能はざれども、而かも明かに性惡を提撕して先秦の哲學壇上一赤幟を樹てたる

は荀子の效なりといはざる可からず。

（五）荀子の性惡說

荀子の、其學說よりいへば、儒の正統たるに近きこと孟子と逕庭なく、寧ろ孟子よりも醇正なりと視得られざるにも拘はらず、宋儒の說天下を風靡してより、孟子のみ獨り孔子と並び稱せられ、荀子は却て儒教の獅子身中の虫なるが如く棄斥せらるゝものは他の所以あるに非ず、唯彼が性惡論を唱へて、孟子の性善論に對抗せんとしたるが爲めなるに外ならず。

然れども荀子が性惡論を唱へたるが故に、之を儒家の系統より疎外せんとするは、畢竟宋儒が理氣の說を立てゝ人の性にも又本然の性と氣質の性とを別ち、其本然の性を以て天理に出でたる善なるものなりとせるより、其學說の上に於て孟子の性善說を推載せざるを得ざるに至りたるに由ると雖ども、此性善說なる者は孟子の始めて說破し出せる者、孔子に至りては未だ性の善惡を說かざれば、此の一點のみによりて、荀子を忌まんとするは宋儒の偏見にして、荀子の爲めには寃枉といはざる可からず。

孔子は人の性を論じて唯、相近しといへるのみ、故に孟子の如く性善なりと說くも孔子の意と相容れざる者に非ざるが如く、亦た荀子の如く性惡なりと見るも、亦必ずしも孔子の

學に反逆せる者なりとはいふ可からず。蓋し孟子の性善說と雖ども宋儒が信ずる如く、儒教の正統の說なりと斷ずべきには非ず、孟子の說は直ちに孔子の言に發明せりといふよりも寧ろ子思の說を展開したるものにして、子思が人の性を以て天の命なりとしたるより來れる必然の結論なりとして觀るべきもの也、即ち既に性を以て天の命なりとすれば、此の天なる者は、上古に於ける一種の宗教的信仰よりして、論證を須たずして直に善なる者と見做されたる者なるが故に、從つて此の天の命なる性なる者も亦善なりといふに到着するは自然なりとす。是れ孔子は單に相近しといひて善惡何れとも斷ぜず、子思は天の命といひて其善たるべきを暗示したるに過ぎざる性の問題が、孟子に至りて明かに性善と斷言せらるゝに至れる所以なり。

荀子の性惡論に至りては、之を孟子の如く人性の本質の主觀的攷察に由りて得たりといふより、寧ろ時代の客觀的觀察に得たりといふを當れりとすべし。蓋し周末は道德上には暗黑時代也、國は國と讎し、人は人と讎す、君臣も仇敵也、父子も仇敵也、夫妻も亦仇敵也。此くの如き世道人心墮落の事實を目擊しつゝ、其間に人となれる者が、人性を以て本より惡なりと感得するに至るは避く可からざるの數なるべく、故に當時に於て明かに性惡を說きたるものは獨り荀子のみなりと雖ども、當時の思想家は、法家の如き刑名家の如き、亦同じく性惡の前提より其學說を演繹したるもの尠からざるを見る。故に荀子の性惡說は主

として時代の暗黑に影響せられたる產物なることは勿論なりと雖ども、吾人は其以外の一因として荀子に對する老莊哲學の感化を數へんことを欲す。

荀子が其晩年を楚國に送りたる爲め、其儒家の信奉者たるに拘はらず、南方思想との接觸の痕跡あることは、前に述べたるが如し。其弟子なりと稱せらるゝ韓非子に、解老喩老の諸篇あり、明かに老子の說の祖述者たるを標示せるを以て推すも、其師たる荀子に、既に其萠芽の藏せらるゝ者ありしを想はざる能はず。

然らば性惡論は、如何なる點に於て老莊哲學の影響を受けたりと見るべきやといふに、老莊哲學は自然と人爲とを別ち、自然は至善なるも人間の爲す所は渾べて惡なりとなす者にして、固より老莊哲學自身に於ては、性を即ち自然なりと觀るが故に性は即ち善に、唯、外感を享受して蕩搖する官能の嗜欲は此本性を傷ふ者にして惡なりとするに在れば、此思想は寧ろ子思の說と相近く、從つて又後世宋儒が佛說と共に老莊の說をも哲學中に包容するを得たる所以も亦此にあれど、然れども又一面より之を觀れば、性が外感の爲めに蕩搖するは、性其者に蕩搖せらるべき性質あり、即ちショーペンハウアーが稱して意欲（ウヰレ）といへるが如き者の存在を假定せるものなりとも論じ得べく、且つ老莊の哲學の如く人爲を惡なりとすれば、其人爲なる者は即ち人間の天性に本づく者なりとも觀察せられ得ざるに非ず。想ふに荀子は如是に老莊哲學を觀取して、其大膽なる性惡說の安住地を此より得來りたる

に非ざるべき乎。

故に性善説も性惡説も共に儒家によりて唱へられ、而して同じく老莊哲學の影響と見るべきものありとせば、荀子を其性惡説を唱ふるが故に儒教の異端視するは酷なりといはざる可からず。孟子は性は固と善なるに、放心のために其本然を失ふを慨して、其善に歸らしめんとし、荀子は性惡なるが故に其性を化して善に遷らしめざる可からずといふ、其善を以て究竟の理想とすること、二人者何ぞ相異ならんや。但荀子が人の性は惡、其善なるは僞也といへる一語が悖理横暴の言なる如く目せられて、宋儒の攻擊の目標たれども、其所謂僞也といへるは、必ずしも善を惡意に解して排斥せるには非ず。此に謂へる僞とは即ち人爲を意味し、作爲の義にして詐僞の義にあらず、故に其善なるは僞也といへるは、教化以て惡を化して善に遷らしめ得べきを説けるに外ならず。古は僞と爲と通し用ふ、僞の語は決して惡意を包含せず、之を惡意に解するは荀子の本意を誤まれる者なり。故に荀子自ら性と僞とを解して曰はく不レ可レ學、不レ可レ事、而在不レ人者謂二之性一、可二學而能一、可二事而成一レ之而在レ人者謂二之僞一と、僞の教化を意味するや是を以ても明かなりといふべし。

故に性惡説は決して荀子の儒家たるの立場を累はすべきものに非ず。

（六）荀子の禮義論